日本水彩畫會横濱支部規定

一、本會は業務又は勉學の餘暇水彩畫を學ばんとする同好者を以て組織す

一、本會は男女を問はず斯道に趣味を有するものゝ入會を許す

一、本會は毎月一回講師として日本水彩畫會より水野以文氏を聘す

一、學科は鉛筆畫、一色畫、水彩畫等とす

一、講師出張は毎月第一日曜日午前九時より午后四時迄とす

但し都合に依り變更するもあるべし

一、會場は伊勢山太神宮前坂本幼稚園とす

但し晴天の日は大抵戸外寫生雨天の日は會場にて靜物寫生右の中適宜の時間を計り講師に作品の批評を乞ふ

一、入會希望者は横濱市英町二ノ十四高畠和雄方に申込むべし

一、本會々員は入會の際記名料として金五拾錢を納め會費として毎月(出缺席の有無に關せず)金五拾錢を納むべし

但し地方會員は毎月出席困難なるべきにより特に毎月金拾錢を納め出席の際のみ金五拾錢を納むるものとす

一、本會々員にして退會希望のものは其旨幹事に申込むべし

一、本會は退會者中特に有志のものを會友とし以て永く本會と關係を持續せんとを希望す

一、本會々友は會費として毎月金五錢を納むべし(但し退會者に限る)會友は臨時寫生會其他諸會に本會より通知を受け會員同等の權利を以て是に列席することを得費用は總て實費負擔のこと

一、本會々員若しくは會友にして三ヶ月以上會費を滯納せるものは退會と見爲す

一、本會は毎月一回(大抵第三日曜日)隨所に臨時寫生會を催す時間及場所は其の都度通知すべし

以上

明治四十五年一月改正

幹事　田中太郎吉

仝　高畠和雄

下關洋畫研究會展覽會（報告）

美しい關門海峽の一角に於て、新春の五、六兩日、洋畫展覽會を開催した。今度の企ては、豫てから計畫してあつた譯ではなく、斯う云ふ氣運に向つて居る矢先へ一人、二人の小さな聲で叫びだす者があつて、忽ち、石油を一時に注ひた樣にポット燃え上つたのだ、其勢は實に熱烈なもので會員は東奔西走、殆んど夜の目もまんじりと眠らなかつた位ひであつた、斯して集つた繪は二百五十餘點、其中から百七十點だけ撰むで陳列することにした、それが各く額椽に入れてあつたのは、地方の展覽會としては珍らしい出來であつた。會場は壬司町文關尋常小學校内で、三室に別つて陳列した。作品は水彩畫が最も多數を占め、油繪、パステル等もあつた、總て小品の多いのは止むを得ないが中には半切位な、可なり大作も數點あつた。出品者は杉田、安廣、森川、阿川、赤松、南保、鳥越、淺枝、名古屋、萩野、

徳永、前原、小石、勇士、東の諸氏と外に數名であつた。全體を通じて一種の地方的空氣が漂はぬでもないが、數年前の地方で見る樣な版畵的な臭味は全然脱して、清新の氣が溢れて居た。或る一部の者は極く現代的な思想を以て萎縮した鼠色の感じの弱ひ、地方的因習を破壞しつゝあるのは嬉しく思つた。入場者は兩日を合して一千百數十名を算したのを見ても如何に此會の盛會であつたかゞ分る、尙又此企に關して教育家諸氏の多大なる御同情ありしを感謝すると同時に大いに會の誇りとする所である。……（J、A）

全羅南道の朝鮮（一）

北山紫巒

朝鮮の風景と申しますと、皆さんが禿山ばかりの多い、川や、湖沼や、深林の少ない荒涼な景色を想像されてゐるやうでございますが、朝鮮にも朝鮮の風景がありまして必ずしも、そんな殺風景に單調な處ばかりではありません。朝鮮の鐵道沿線に沿ふて旅した位いで、朝鮮通がつて居る人の話を信じて、朝鮮は繪にならぬ處、殺風景な處と定めて了ふのは、あまりに早計すぎませう、少なくとも朝鮮の景色を云々せうとするには、少しく未開の地方に迄、足を踏み入れ、代表的朝鮮の景色を味ふて、評して頂きたひと思ひます。

斯う申しましたとて、私は別に朝鮮に生れた、混血兒（あいのこ）でもなければ、無論、鮮朝から嫁を迎へたと云ふやうな關係もありませんから我田引水的に、大袈裟な御話をする、義務も何もないのであります、只だ吾、帝國の新領土として且つ一二年の間、同地に遊むで、其土地の風光、風土に親しむだ關係から、私は同地を愛する情より、此地の風光を皆樣に御紹介したい、さうして彩筆を握つて旅する人の多少の便にも供したいと思ひまして、實は未熟な筆を弄して御紹介申上げる次第であります。

期鮮と一口に申しましても御承知の通り殆ど吾全土に等しい處でありますから、これを一々擧げて御話すると言ふことは一朝一夕には盡しがたいのみならず、聞いたからとて矢鱈、長話に失してあまり畵の方に有益なことでもありませんから、それよりも暑中休暇の一ヶ月位ひを利用して、面白く且つ經濟的に寫生旅行を企て得ると云ふことの御參考になる材料を撰むで、申上げた方が却て興味が深からうかと思はれましたから私は此點より、主として氣候、其他の關係の、あまり本邦と變りのない、さうして風光明媚なる全羅南道の朝鮮を旅日記として御話することにいたしました。

私の釜山へ渡つたのは五月の初め頃でした。多少恐怖の念を以て目して居りました對島海峽も至極平穩で、殆ど疊の上を行く樣でした。

故國の山々がポーと霞むで見えなくなると、左の方に當つて對島が淡く繪の樣に浮きだしました、それも何時の間にか黑い水平線上に消え去つて了ふ頃、何處から來たのか、すれ違ひさま